



会議レポート

第80回全国大会開催報告 ～みんなの情報処理教育～

2018年3月13日(火)から15日(木)の日程で、情報処理学会第80回全国大会が早稲田大学西早稲田キャンパス(理工キャンパス)で開催された(写真1)。イベント企画セッション数は26セッション、一般・学生セッションは164セッションであった。また、一般・学生セッションでは1,223件(当日発表キャンセルを除いた数値)の研究発表があった。全国大会への参加者数は例年と同程度の3,070名であった。それに対して、全国大会と同時に生中継されたニコニコ動画の視聴者数は昨年と比べ半減し約47,000名であったが、プログラム委員会委員長としては、十分ではないもののある程度の規模を確保できたと考えている。

今回の全国大会ではプログラム委員会はスローガンを「みんなの情報処理教育」とした。この背景として、実際に委員会が開催されるまでに提案されたイベントとしてプログラミング教育に関するセッションが多数企画されていること、2年ほど前に小・中・高等学校にプログラミング教育を導入することが我が国の方針として示されたこと、やはり情報処理分野に従事している本会の研究・開発者としては無関心ではられない分野であることなどを理由に、本スローガンとすることを決定した。ほかのテーマとする意見もあったが、本会の特徴を考慮した結果でもある。

本スローガンに連動する形で、特に小・中学校のプログラミングや情報教育に精力的に携わっている鹿野利春氏(文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター 研究開発部 教育課程調査官)による特別講演が、初日で

ある3月13日の午後に開催された(写真2)。中央教育審議会答申では「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力・人間性」を子供たちに必要な育成すべき資質・能力の3つの柱として設定している。この柱の育成のために情報活用能力やその一部にプログラミング教育を位置づけることが決定している。他方、迎え入れる側である小・中・高等学校の具体的な対応、環境整備の実例や問題点などについてもお話をうかがった。また本講演の司会者を、鹿野氏をご紹介いただいた早稲田大学名誉教授 寛捷彦氏にお引き受けいただいた。

上記の特別講演に先立ち、例年通り、西尾章治郎本学会長による大会挨拶(写真3)、各種表彰式ならびに情報処理技術遺産認定式(写真4)が滞りなく粛々と執り行われた。

2日目の3月14日には4件の招待講演として、ACM会長のVicki L. Hanson氏(ビデオによる講演)、China Computer Federation 評議会委員のShi-Min Hu氏、Korean Institute of Information Scientists and Engineers(韓国情報科学学会)会長のYoung Ik Eom氏、2018年IEEE Computer Society 会長の笠原博徳氏(早稲田大学教授)の講演が連続して行われた。それぞれのご専門分野から最新の研究に関する話題とともに、各学会の状況・課題や逆に日本側が対応すべき点などが紹介あるいは提案された(写真5)。

その他、魅力ある多くのイベントが開催された。特に今回多く見受けられたのは、冒頭でも述べたように情報処理教育に関するものである。たとえば、「子ども達に、い



写真1 第80回全国大会の看板

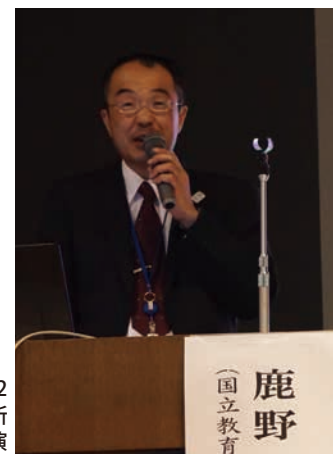


写真2
文部科学省国立教育政策研究所
鹿野利春氏による特別講演



写真3 西尾会長挨拶

ま必要なマナビ：プログラミング的思考や読解力の必要性和教育のあり方は？」では、柏市のプログラミング教育の導入例、現状の課題、学習用のツールと学習の評価基準などの講演や、実際に中高生を対象とした調査で特に低学年では読解力の不足が学習到達度に影響を与えているという興味深い話があった。「小中高で必修されたプログラミング教育とは」では、新学習指導要領の方針策定にかかわった先生による求められる教育の講演や、教育経験が豊富な小学校の教諭から実例の紹介等があった。また、「カリキュラム標準 J17と情報教育」では大学の理工系情報専門学科の最新の専門教育カリキュラム標準 J17の紹介があり、「情報科学的アプローチによる『情報科』大学入学者選抜における評価手法の研究開発」では、文部科学省大学入学者選抜改革委託事業としての2年目の報告と、情報入試実施に向けての課題が議論された。

2012年度から継続的に開催されている「第6回 情報処理学会 国際人工知能プログラミングコンテスト：Samurai Coding 2017-18」は、若い世代から将来の第一線の開発者になり得る、また世界市場を舞台に活躍できる人材を育てることを目的としたコンテストである。非常に多数の応募の中から16チームが予選を通過し、3月14日に決勝が行われ、激戦が繰り広げられた(写真6)。この状況はニコニコ動画でも配信された。

また各研究会で気鋭の若手を募集あるいは推薦いただき、多様な分野を俯瞰するとともに、異分野間の研究交

流の発展の場とするために企画された IPSJ-ONE も多くの聴衆をあつめた(写真7)。このイベントは、77回大会から継続的に行われているもので、最終日である3月15日に、今回は16名の招待講演があった。例年通り注目度の高いイベントであり、それぞれの研究分野でアクティブな若手による最新の研究とその意気込みを知る良い機会であったと感じている。ここではすべてについて述べることはできないが、このほかにも計算社会学、ビッグデータ活用、コンピュータグラフィック、サイバーセキュリティなどの最新の話題に関するこれら多くのイベントも盛況であった。また「IT情報系キャリア研究セッション」や「インターンシップについて本音を語る：大学教員×企業×学生」などは、主に情報系の学生から注目される企画であった。

最後に、今回大会が成功裏に終わったのは、東野輝夫組織委員会委員長ならびに大会組織委員会メンバ、プログラム委員会メンバ、山名早人実行委員長ならびに裏方としてサポートいただいた非常に多くの実行委員の先生方とアルバイト学生、各研究委員会の主査・幹事の方々、学会事務局、その他多数の関係者の献身的な貢献によるものである。また多くのスポンサー、ランチョンセミナースポンサーによる企業・団体からのお力添えをいただいたこともここで申し添えておきたい。なお、次の第81回全国大会は、2019年3月14日(木)～16日(土)に福岡大学七隈キャンパスで開催される。

(菅原俊治/早稲田大学基幹理工学研究科)



写真4 情報処理技術遺産認定証授与者のみなさま



写真6 Samurai Coding 2017-18



写真5 招待学会を交えたミーティング



写真7 IPSJ-ONE の看板